2 年間の研究科長・学部長

今日で学部長室ともお別れである。綺麗に片付いた机の向こうの窓から、咲き始めた桜が見える。2 年前に緊張気味に机に向かい、窓から桜を眺めたことが思い出される。かび臭い部屋に入り、まずは窓を開けて換気に努めてきた。寒いときにもドアーをほとんど開けっ放しにして、できるだけ「開かれた」学部長室にしてきた。ほぼ毎日、朝と昼に学部長室で「作業」をしてきた。ここにいると、教員の「動向」を把握でき、事務室の状況もわかり好都合であった。IT 時代にあっても、膨大な書類に目を通して判を押すことが多かった。

2 年間の「大役」をなんとか果たすことができ、正直なところ、ほっとしている。学部長就任の直後のように、また腰痛で悩まされているが。レポートに何回か書いてきたように、この 2 年間は法人化に向けた準備に没頭してきた。中期目標・中期計画の策定をはじめとして、学部と研究科の存在感を学内のみならず、地域社会に高めることに力を注いだ。

当初は困難と考えられた教職課程を立ち上げることができた。中学・高校の英語と社会科関係の 1 種免許、それと大学院の専修免許である。私も昨年 2 回にわたり、文部科学省に緊張して出向いた。今年度は社会福祉士資格についても申請手続きを行うことにしている。まずは免許と資格で学部・研究科の特色を生かし、対外的にもアピールしていきたい。人間文化研究所を設立できたことも、研究活動を推進していくうえで貴重な成果といえる。大きな看板のわりには（看板はしっかりと掛かっているが）、運営面など課題も多いが、時間をかけて存在感を高めていきたい。卒業式の挨拶のなかで、ぜひ「奮闘努力の甲斐もある」人生を送ってほしい、そんな社会を作っていきたいと述べた。この 2 年間は苦しみながらも、事務の人たちや同僚のおかげにより、奮闘努力した甲斐があったと思う。

(2006 年 3 月 31 日)